

# 哲学思想の基礎

## 第二部：世界を理解する哲学

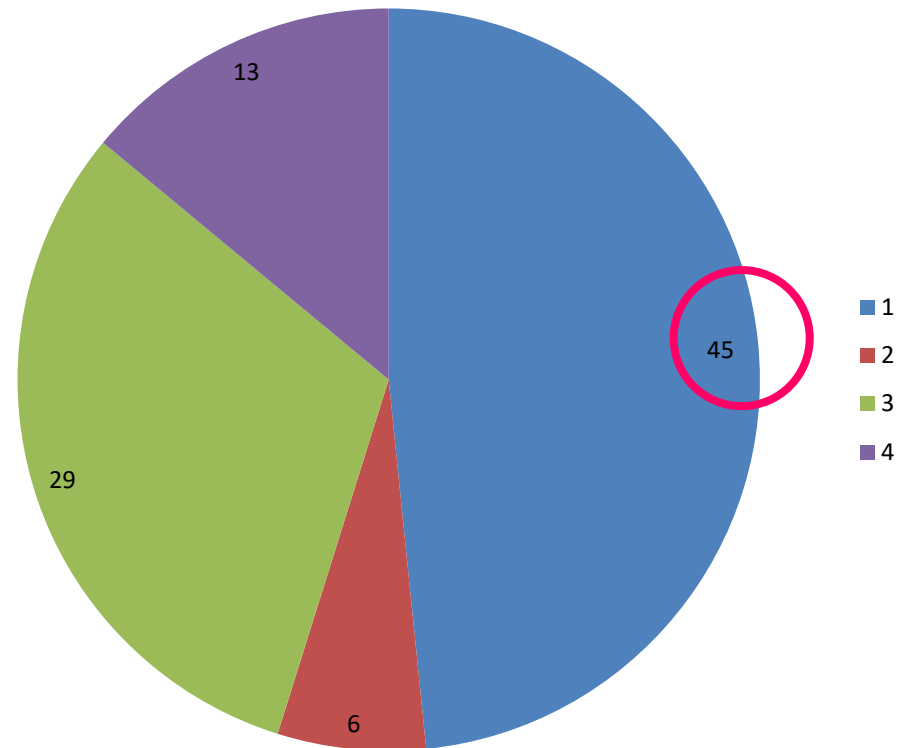
担当：山口裕之

# 前回の小テストの解答

# 問1

- 「外在的な批判」とはどのような批判か。

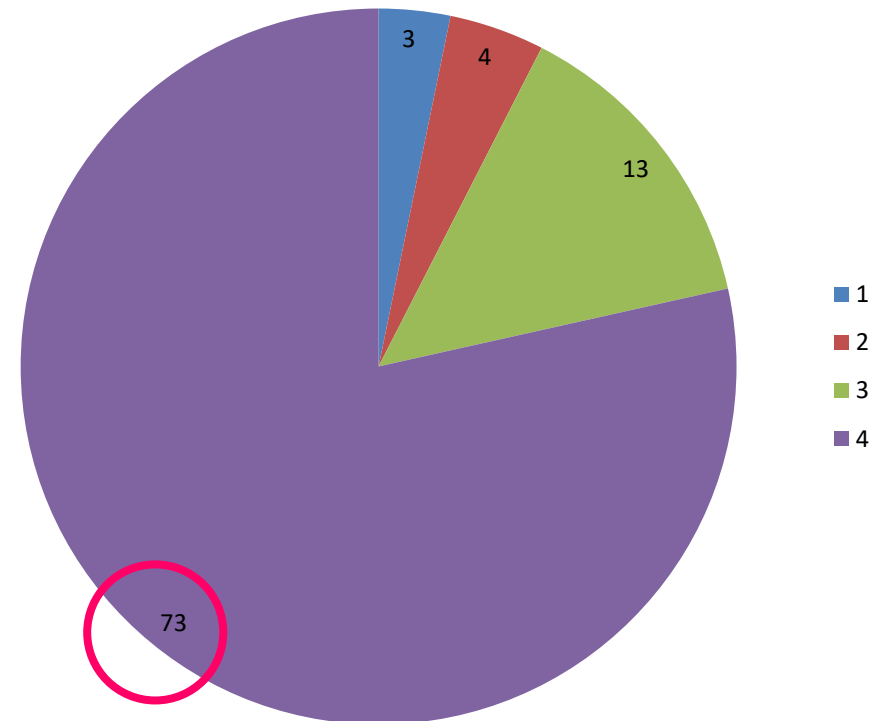
- ① 理論の内容にかかわらず、別の考え方を当てはめて否定する。
- ② 理論を前提として、理論自体を批判する。
- ③ 理論のある部分が論理的に飛躍していることを指摘する。
- ④ 理論のある部分が他の部分と矛盾していることを指摘する。



# 問2

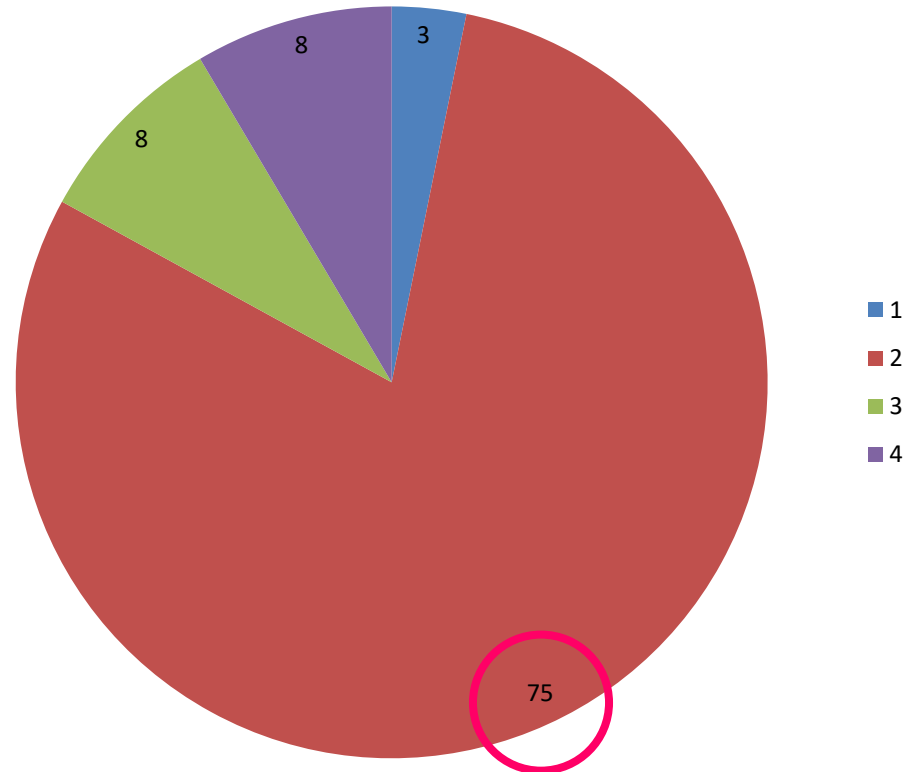
- 内在的な批判とは、どのような批判か。

- ① 自分の体験をもとに批判する。
- ② 自分の感情や好き嫌いをもとに批判する。
- ③ 理論の内容にかかわらず、別の考え方を当てはめて否定する。
- ④ 理論を前提として、理論自体を批判する。



# 問3

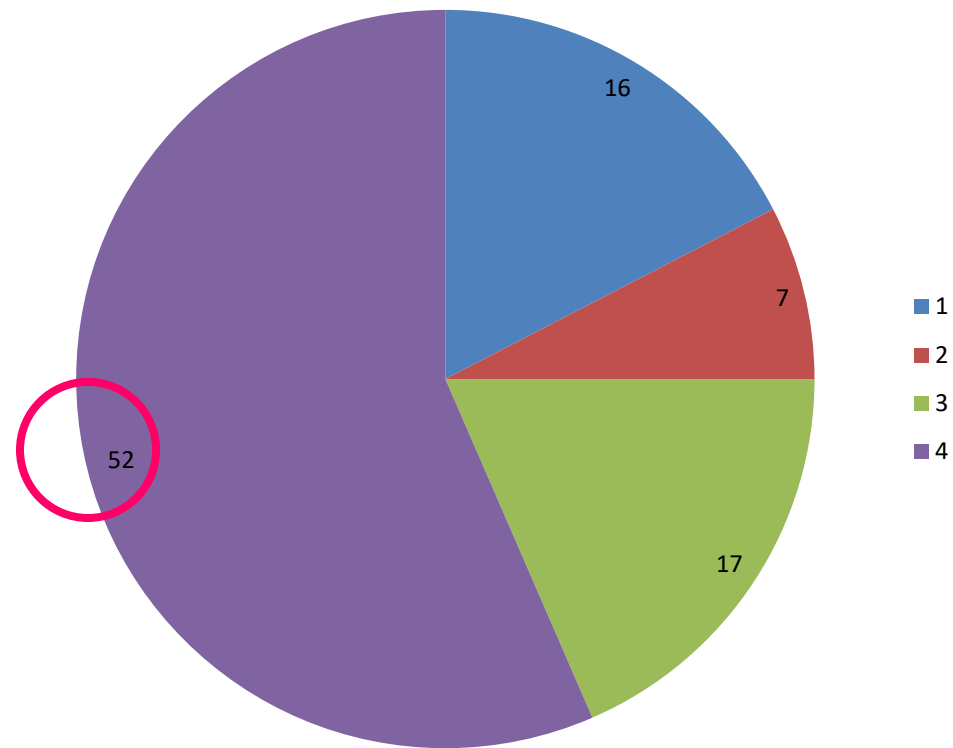
- 前回のデータによると、神の存在を信じる人の割合について、正しいのは、
  - ① 主要先進国では、3割以下である。
  - ② アメリカでは9割以上である。
  - ③ 日本では、ほとんどいない。
  - ④ ベトナムでは、ほぼ100%である。



# 問4

• 存在論とは、

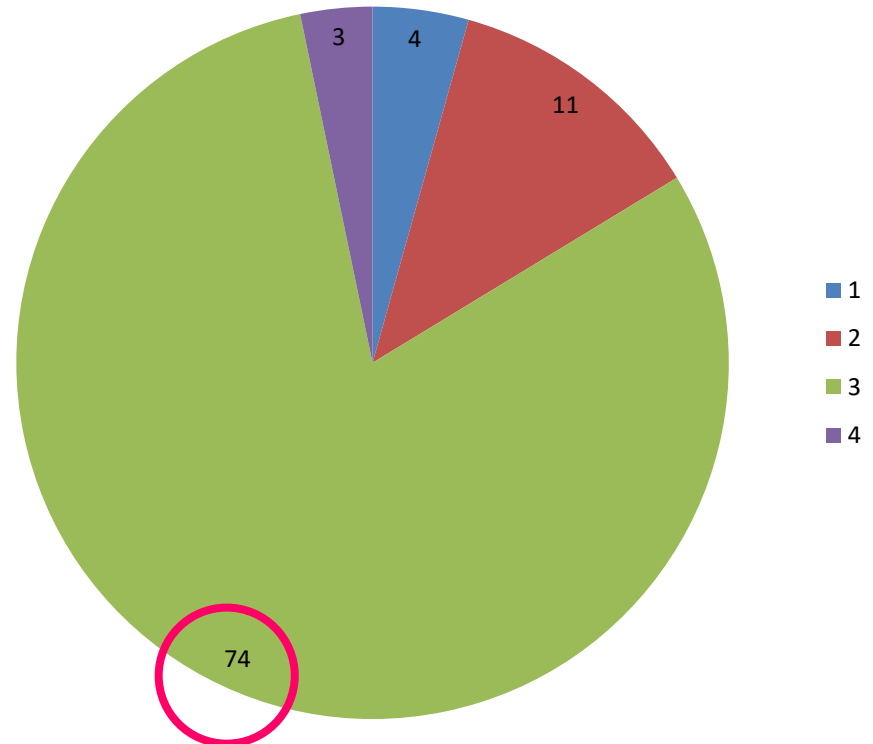
- ① 物について正しく知るための方法を考える。
- ② 心のあり方に焦点を当てる。
- ③ 物と心の関係を考える。
- ④ 物そのもののあり方を考える。



# 問5

• 認識論とは、

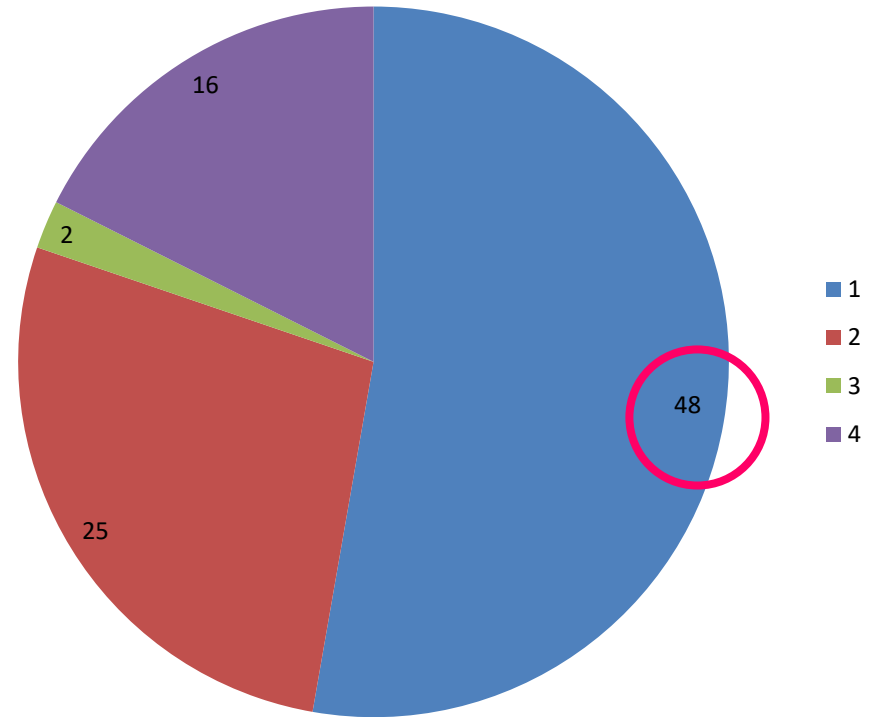
- ① 物そのもののあり方を考える。
- ② 物は実体と形相できていると考える。
- ③ 正しく知るためにはどうすればよいかを考える。
- ④ 神の存在に焦点を当てる。



# 問6

- デカルトの、「われ思う、われ在り」とは、どういうことか。

- ① 「私が思う」ことは、つまり、「私が在る」ということである。
- ② 「私が思う」という事実から、「私が在る」ことを推論する。
- ③ 「私が在る」ということも疑わしい。
- ④ 「私が思う」ことが原因となって、「私が在る」という結果が生じる。

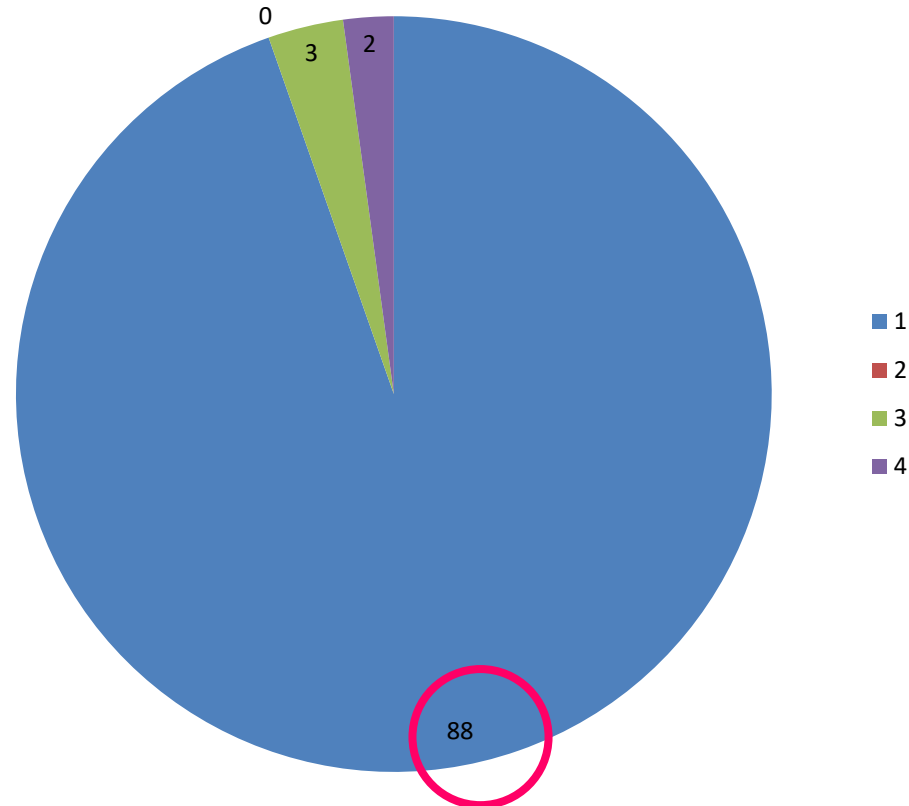




# 問7

- デカルトは、なぜ神の存在を証明する必要があったか。

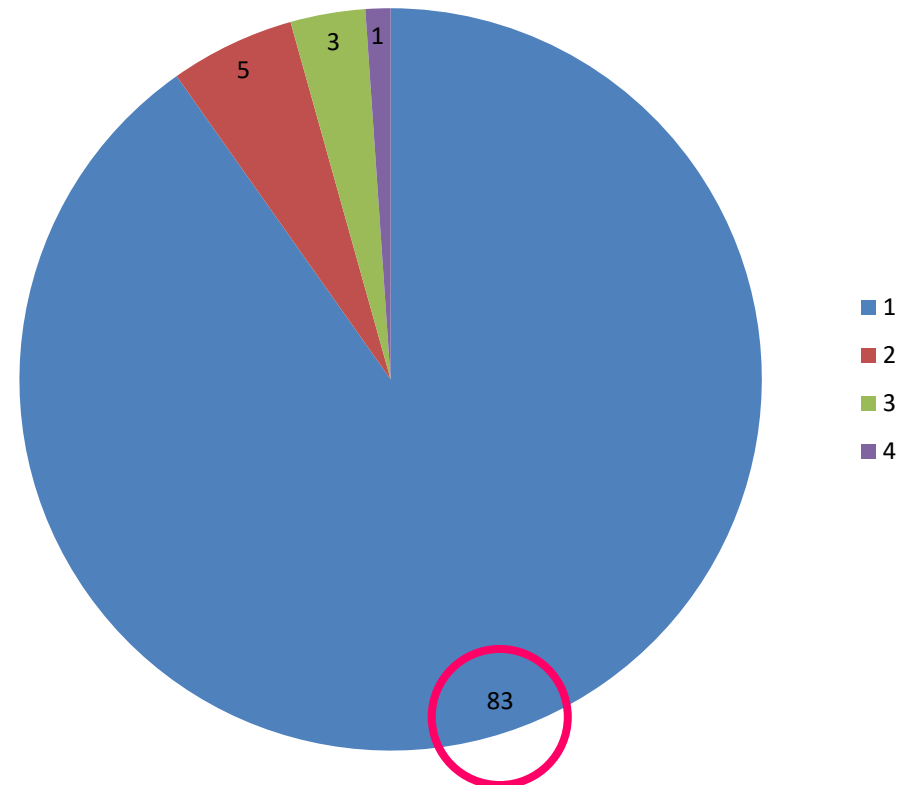
- ① 「われ思う、われ在り」のみが真理だとすると、世界には私の心しか実在しないことになるから。
- ② キリスト教徒だったから。
- ③ 自分が説明できないことをごまかすため。
- ④ 「われ思う、われ在り」ということから、私の存在も疑わしいから。



# 問8

- デカルトの考えとして正しいのは、

- ① 数学や自然法則を神が創造した。
- ② 神も数学や自然法則にしたがう。
- ③ 数学や自然法則は、人間が実験によって明らかにする。
- ④ 人間は生まれたときは白紙である。



# 前回の授業へのコメント

# くどいようですが、神とは

- アリストテレスやデカルトは、この世界には論理的には説明できない事実があるということに直面した。それを説明するために「神」を持ち出した。
  - 神＝「説明できない事実」と考える方が理解しやすい。
  - たとえば、虚数は $x^2=-1$ を「説明するもの」でなく、 $x$ そのもの。
  - あるいは、自然法則＝神、といってもよい。
    - スピノザはそう考えた。

# 心＝脳

- マルブランシュは、空気の振動を音と対応付けるのは神だと考えたが、私は脳の電気信号ではないかと考える。
- 「心＝脳」と考えれば、神は不要である。
  - 実は、マルブランシュは、「脳の振動」と感覚を結びつけるのが神、と言っている。
    - その対応関係も「自然法則」であると言う。
  - 心は電気信号ではない。どうして電気信号が心になるのか、は現在でも謎。
    - 詳しくは山口裕之『認知哲学』を読んでください。

# 論理的不可能と技術的不可能

- 17世紀には論理的に説明不可能なことを「神」と呼んだが、論理的に説明できないなら、もうどうすることもできないのだろうか。1世紀前には不可能だったことも、現代の技術なら可能になったことがたくさんある。
  - 「論理的に不可能」なら、もうどうすることもできない。
  - 不可能の三種：論理的に不可能・技術的に不可能・現実的に不可能。

# 定説を反証

- 教科書に載っているレベルのことは、否定されることが少ない。しかし、現在は正しいとされている説も、だれかが反証したときには、間違いだということになる。
  - 現実には、各分野のコアにある説は、一度や二度反証されたところで、廃棄されない。
    - 知識は体系。コアの説は、他の様々な知識を支え、それらによって支えられている。
  - プラナリアの学習実験が受け入れられなかった理由は、「学習は脳が行う」という、心理学の根本的な部分を否定するから。
    - マコーネルは、物質がどうして多様な記憶情報を担いうるのかに関する理論を提示できなかった。

前回の残り。



# 前回のまとめ

- デカルトの心身二元論からの帰結:この世界には、論理的に明らかにできないことがある。
  - 世界そのものの存在する理由。
  - 自然法則が存在する理由。
- 経験論的な方法で得られた自然法則は、絶対的な真理には至れない。
  - ポパーの科学哲学によると、現時点で反証されていない仮説である。
- 現実的には「反証」の考えがそれほどうまくいくわけではない。
  - プラナリアの「学習」実験

# プラナリアの学習実験

- プラナリアに「学習」させる。
- 学習したプラナリアを切断すると、尾の側から再生した個体にも学習効果が残っていた。
- 学習済みのプラナリアをすりつぶして他のプラナリアに食べさせると、学習効果が伝達された。
  - さんざんに批判された。
- 批判に対応するために、反証実験を繰り返した。
  - その結果、うやむやになった。
  - マコーネルは、科学研究資金を得られなくなった。

# 科学的知識の成立(科学者共同体での合意形成)にかかわる駆け引きの実態

- 論文を書いて高いランクの科学雑誌に掲載する。
- 高いランクの論文を引用して自説を補強する。
- 研究機関の「権威」もやはり関係する。
- 論文掲載の実績を使って資金を調達する。
- 「実験結果」も駆け引きの一つの道具。

→ラトウール『科学が作られているとき』産業図書1999などを参照。

# 私の担当授業はこれでおしまい。

- この世界における「真理」を探究しようとする営みとしての「哲学」が、「自然科学」とどのように関わるか、分かりましたか？
- ポイントは、個と普遍の関係・実験と論理の関係
  - 論理によってわかることの限界
  - 実験によってわかることの限界
- 真理の探究は、「経験(実験)がすべて」「論理がすべて」といった単純な二分法ではない。

前回分の小テスト

# 問1

- 哲学における「神」とは、
  - ① 自分が説明できないことをごまかすためのもの。
  - ② 人格を持つキリスト教の神。
  - ③ 自然法則が存在していることの原因。
  - ④ この世界の内部に存在しているもの。

## 問2

- 心身二元論について正しいのは、
  - ① 事実として心と体は影響を与え合うので、デカルトに心身二元論は間違いである。
  - ② 論理的に心と体は別の実体なので、心と体が影響を与え合うことは錯覚である。
  - ③ いかにして心と体は影響を与え合うのかが哲学上の「謎」ということになった。
  - ④ 心と体は影響を与え合うので、心と体は同一の実体である。

# 問3

- 万有引力の法則について正しいのは、
  - ① 物体間には、質量の積に比例し、距離の2乗に反比例する力が働く。
  - ② リンゴも月も、すべてのものは落下する。
  - ③ 質量と力の間には論理的な関係があることを示した。
  - ④ 物体は、力を加えないと等速直線運動する。



# 問4

- マルブランシュの「機会原因」の例として適切なものはどれか。
  - ① 心には体を動かすような力がないにもかかわらず、「動こう」と思ったときには必ず体が動く。
  - ② 空気が振動すると、その力によって鼓膜が振動する。
  - ③ 鼓膜の振動から、物理的な因果関係によって音が生じる。
  - ④ ある物体が、他の物体に衝突したとき、エネルギーを伝達する。

# 問5

- 物体が運動法則に従って運動することを、マルブランシュが説明すると、
  - ① 普遍的な自然法則に従うよう、世界を創造した時に神が命じた。
  - ② 法則は実在せず、現象の継起の規則性を人間が数式化した。
  - ③ 物体が持つ力によって必然的に法則に従う。
  - ④ 物体同士が接触した時に、法則に従うように神が動かしている。

# 問6

- 万有引力の法則が成り立つ原因について、ニュートンはどのように考えたか。
- ① 質量と引力の間の論理的な関係による。
  - ② 法則が成り立つ原因は不明なので、答えられない。
  - ③ 神がそのように創造したからだ。
  - ④ 離れて働く超能力である。

# 問7

- 帰納法の論理的な問題は何か。
  - ① 有限回数の実験観察から普遍に至れない。
  - ② 人間の行う実験には精度の点で限界がある。
  - ③ 実験には個人の技能がかかわる。
  - ④ 普遍に至るためには少なくとも1万回以上の実験観察が必要になる。

# 問8

- ポパーはどのように考えたか。
  - ① 帰納法では普遍に至れないので、自然法則は虚構である。
  - ② ある仮説が間違っていることなら、一回の実験で明らかにできる。
  - ③ 科学者は、自分の仮説が正しいことを証明するための実験を行うべきである。
  - ④ フロイトの無意識こそが、科学的仮説の典型である。

# 問9

- 「科学的真理」について正しいのは、
  - ① 実験観察により真理が証明できる。
  - ② 論理的に証明されたものだけが真理である。
  - ③ 結局のところ、実在とは関係ない、人間が考えたものである。
  - ④ 論理と実験観察をもとに、科学者共同体の中で合意形成される。